

2 0 0 4 年 2 月 6 日

株式会社 富士キメラ総研
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町
2-5 F・Kビル
TEL.03-3664-5841 FAX.03-3661-7696
URL : <http://www.group.fuji-keizai.co.jp/>
広報部 03-5614-1078

プラスチック建材市場調査を実施

- 防犯・セキュリティの面から合わせガラス用中間膜は 2 0 0 7 年に 2 7 億円規模に -

総合マーケティングビジネスの(株)富士キメラ総研(東京都中央区日本橋小伝馬町 社長 表 良吉 03-3664-5841)は、2 0 0 3 年 1 2 月から 2 0 0 4 年 1 月にかけて、他素材建材との代替もあり需要を急速に拡大しつつあるプラスチック建材市場の調査を行った。その結果を調査報告書「2 0 0 4 年 プラスチック建材の現状と将来展望」にまとめた。

高成長プラスチック建材の市場

防根シート(土木・緑化資材) 2 0 0 7 年市場予測 9 億円

防根シートは、植物の根の成長による構造物への障害を防ぐ、根茎調整資材である。新規アイテムでその成長率は高い。屋上緑化といった需要拡大で新たに登場した製品である。現状では輸入品が多く、今後いかに国内に合った製品作りがなされるかが普及のポイントとなる。ここ数年国内メーカーも参入してきている。

樹脂サイディング材(屋根外装材料) 2 0 0 7 年予測 6 0 億円

樹脂サイディング材は、海外では長い実績を持つが、国内普及はこれからである。耐久性に優れた外装材であり、簡易に施工できる点が評価されている。国内では需要が寒冷地などに限られていたが、今後は汚れが付きにくいなどの特性で、全国的な採用が期待される。

合わせガラス用中間膜(開口部材) 2 0 0 7 年予測 2 7 億円

合わせガラス中間膜は広く自動車に應用されているが、現在、防犯・セキュリティから利用が増えている。近年日本でも社会生活を営む上で安全対策が強く求められており、防犯対策建材の必要性は高まっている。教育施設、銀行などでも、セキュリティ対策として採用が増えつつある。

木粉入り合成木材 2 0 0 7 年予測 4 0 0 億円

廃木材を有効活用し、天然木と同等の風合いを持つ成形用材料で、今後このような環境を意識した天然素材代替材料が注目される。

成長性の高い品目は、環境適合が共通の要素となっている。単に、リサイクルなど環境に優しいだけでなく、省エネや人間に対しても優しいアメニティ性、安全性、ヒートアイランドに関与した製品など幅広い意味での環境適合になっている。建築材料はその性格上使用期間が長く、使用量も大きいいため、L C A (ライフ・サイクル・アセスメント) を意識した製品開発が一層求められる。

プラスチック建材の市場動向

建設業界は民間建設投資の縮小と公共投資の削減により、長期的に低迷しており、1 9 9 7 年以降縮小している。1 9 9 2 年度に 8 4 兆円に達していた建設投資は、2 0 0 2 年度には 5 6 兆 5 , 0 0 0 万円まで低下している。既存建設物をリニューアルすることで、長期利用を図る対応が増加しており、建設投資に占めるリニューアル工事のウエイトが拡大している。

また、屋上緑化のような新市場の創出や、省エネ・省資源対策、I T 化、生活空間の快適性向上などに対応した建設技術の開発、建設材料の高機能化/高性能化が進展している。

こうした市場環境の中で、プラスチック建材は軽量、耐蝕、低コストなどの特性による建設コスト低減に貢献するとともに、それぞれ独自の機能を活用した新製品開発が進められている。他素材からの代替や新規需要開拓により、需要が増加している商品も多くみられる。

プラスチック建材市場規模推移(8 カテゴリー 4 6 品目)

2 0 0 3 年市場規模 9 , 1 8 4 億円 2 0 0 4 年市場規模見込み 9 , 1 9 3 億円

2 0 0 3 年実績は前年比横ばいの推移となった。これは長引く景気低迷による住宅着工数の減少によるものである。

2004年以降は、壁・内装材料、住設機器・その他以外の分野ではプラス成長へ転じていくことが予測される。マイナスからプラスへと転じている分野は、開口部材、断熱材料、土木材料・緑化資材、注目材料（木粉入り合成木材、生分解性プラスチック、人工大理石）の4分野に亘る。開口部材や断熱材料は省エネ住宅と環境適合性（ノンフロン化、リサイクル体制の構築など）から景気が回復すればその潜在力はまだまだ大きく、各社とも新製品開発に積極的である。

配管材料7品目は2003年までの成長率が高い。（2003年市場規模 1,329億円）既存金属管からの代替が伸びているため、PE（ポリエチレン）管へのシフトが進んでいる。配管材料は、新設需要が伸び悩む厳しい市場環境でも、生活に必要なインフラであること、改修需要が一定期間で発生することなどから比較的市場が安定している。

次いで屋根・外装材9品目がマイナスからプラス成長へ転じていく事が予想される。（2003年市場規模 2,079億円 2004年市場規模見込み 2,118億円）伸びているのはPC（ポリカーボネイト）板、FRP（繊維強化プラスチック）板、防水シート、樹脂サイディング材、保水性マットの5品目である。伸びが顕著な防水シート、保水性マットはヒートアイランド対策需要として、樹脂サイディング材は寒冷地を中心に施工容易性の点とリフォーム需要から伸びている。PC平板は、道路の壁材（トンネル出入口口など）や屋根材として伸びている。今後、新たな表面処理技術による新規需要開拓が期待されている。

プラスチック建材を取り巻くリサイクル事例

資源循環型社会構築をキーワードに、リサイクル対策が進められており、建材分野でも建設リサイクル法が施行されている。

現段階では、プラスチックは建設リサイクル法の対象ではないが、将来的には対象となることが想定される。そのため業界団体、行政、民間企業などリサイクル構築に関する研究開発が行われている。

具体的リサイクル事例

塩化ビニル管・継手

塩化ビニル管・継手協会では、資源循環型社会を創造する一貫リサイクルシステムの構築に取り組んでいる。塩ビ管は早くからリサイクルシステムが構築されており、2002年度時点でのリサイクル率は48%となっている。リサイクル拠点は、協力会社16社21拠点と中間受入場32拠点を合わせて53拠点が全国に設置されている。現在は管、あるいは管からその他製品へというマテリアルリサイクルが主に行われており、高炉原料化、セメント原燃料化などのケミカルリサイクルは実証実験が行われている最中である。

塩化ビニル管は、資源有効利用促進法で特定再利用業種に指定されており、リサイクル努力が義務付けられている。この点も、リサイクル活動を積極的に推進する上でポイントとなっており、リサイクルしやすい製品として位置付けられている。

塩ビ床材

塩ビ床材は使用済農業用塩ビフィルムや電線被覆材の再利用先として、リサイクルの受け皿となっているが、インテリアフロア工業会を中心に床材から床材のリサイクルに着手している。

調査目的 主に住宅内装・外装材や断熱材、配管材料、土木材料などの建築分野で使用されるプラスチック製品を対象として材料、技術動向の変遷、及び、これらに対する要求特性とその対策を調査。その需要動向、メーカー動向を把握し、建築分野における注目材料市場の国内における位置付け、方向性を明確化することを目的とした。

資料タイトル : 「2004年 プラスチック建材の現状と将来展望」

体 裁 : A4判 199頁

価 格 : 101,850円 (本体97,000円 消費税4,850円)

調査・編集 : 富士キメラ総研 研究開発本部 第二研究開発部門

TEL:03-3664-5841 (代) FAX:03-3661-7696 e-mail:em2@fcr.co.jp

発 行 所 : 株式会社 富士キメラ総研

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2-5 F・Kビル

TEL03-3664-5841 (代) FAX 03-3661-7696

この情報はホームページでもご覧いただけます。URL : <http://www.group.fuji-keizai.co.jp>